

西周の「哲学」再考

—『百一新論』と慶応年間の手記から—

播本 崇史

1. はじめに

「哲学」という二字は、西周（文政12年/1829年-明治30年/1897年）がその著書『百一新論』¹において初めて用いた語である。西はこの語において、如何なる意味を与えようとしたのであろうか。本論では、西が打ち出したこの「哲学」について再考を試みたい。

『百一新論』の主な内容は、西独自の切り口による中国思想の変遷史と見ることができる。問題となる「哲学」は、その『百一新論』の終盤に、唐突に登場する²。

『百一新論』における「哲学」には、単にフィロソフィの訳語³としての理解というだけでなく、西独自の思想、西特有のフィロソフィ理解、その観点があるように思われる。それは現代において人口に膾炙するところの所謂「哲学」理解と変わらぬものであったのか否か。西自身によるその理解を西自身の言葉から探り明らかにしておきたい。とりわけ、訳語としての「哲学」ではなく、『百一新論』において言及されている西の「哲学」理解について考察を試みたい⁴。

2. 『百一新論』研究の傾向性

『百一新論』に関する先行研究では、各研究者が西自身有していたと理解できる西洋哲学知識を背景に、その徂徠学に基づく学的立場から、朱子学批判に至る構図が示されてきた⁵。

いずれも西の思想を素描するものであると言えるが、その多くは『百一新論』の内容のみならず、西がその前後に執筆した諸著によって考察構成されている。具体的には、「文久二年五月十五日」付の松岡鱗次郎宛書簡（『全集』第一巻「西洋哲学に対する関心を述べた松岡鱗次郎宛の書簡」1862年）、「開題門」（明治3年/1872年）、「生性発蘊」（明治6年/1873年）、「教門論」（明治7年/1874年）といった文献を挙げることができる。さらに、これらの分析を通じ、嘉永元年（1848年）3月の「私記」（『全集』第一巻「徂徠学に対する志向を述べた文」）に明確に示されていた西自身自覚的であった学的「転向」を裏付けるかのような作業が行われてきた。

すなわち、『百一新論』の内容理解、あるいは、日本思想・哲学史上において初出となる「哲学」なる語の理解については、該書の刊行前後に執筆された諸著を用いながら蓋然的な論究がされてきたと言える。何しる該書における「哲学」なる語は、その終盤において唐突に提示される語であって、西が如何なる理解をそこに込めていたのかということは、その文脈だけからでは窺い知ることが難しいのである。

「教門論」は、西が『明六雑誌』4-6、8-9、12号（いずれも明治7年刊行）に発表した論文である。祭政一致と政教一途とを問題視している点で、『百一新論』とも主題が重なる。桑木巖翼氏は「『百一新論』の続稿と見るべきもの」⁶としている。

「開題門」は、西がコントの実証主義を宋儒と対比的に捉え、このことを自ら言明したものとしてしばしば紹介される。「余謂宋儒與羅覲奈伽士謨、其說雖有出入所見頗相似、唯至晚近、ラシヨナリズム 孛士氏非士謨、ポステイビズム 據證確實、辨論明哲、將有大補乎後學、是我亞細亞之所未見、而澳梧支坤度實首唱之」⁷は、西の思想的特徴を確認する上で、まずもってよく引用される箇所である。理性主義・合理論から実証主義、実証論（西は「実理」と訳す）への傾倒が窺われる。

また、該書には「哲学」という語は登場しないものの、「斐鹵蘇比^{ヒロソヒ}」なる用語が用いられており、「東土謂之儒、西洲謂之斐鹵蘇比、皆明天道而立人極、其實一也」とある。すなわち「東土の儒と、西土の斐鹵蘇比とは、いずれも生命を根底から支える人為を越えた普遍的作用と、それをかくあらしめる原理とを明らかにして、人間存在としての根本原理を打ち立てており、その実質は同一である」と理解できる⁸。

一般に西が言う「哲学」は、例えば『岩波哲学・思想辞典』（岩波書店、1998）では、「一つの原理にもとづいて諸学の全体化を目指すような根本知としての哲学」⁹と理解されている。

大久保氏は、「開題門」の「解説」において、西周思想の「原型」が表されたものとして「西の哲学的開眼であり、開題の門なのである」¹⁰と評している。また蓮沼啓介氏は「西洋哲学の学派のうち『羅颯奈恤士謨』Rationalism 合理論哲学が宋儒の思弁と『頗相似』た方法によっている事を、従って相似た方法上の誤りに陥っていることを西は見出したのである」¹¹と指摘する。

西が官学として当時確固とした地位にあった朱子学（西自身は「宋学」と述べる）に対し、かかる相対的視点を持ち得たのは、朱子学批判を展開していた徂徠学と、コントの実証哲学・実理哲学の影響である。蓮沼氏が指摘するように、西にとって、合理論とは「『取理於胸臆』という思弁の独断」¹²であった。西は客観的妥当性を担保する理論として、実証性ないし実践性、「実理」を求めたのである。

この「独断」に対する警戒は、実は中国哲学史上においても、12世紀以来、極めて重要な意義をもつ論争として繰り広げられてきた¹³。西がかかる論争をどこまでくみ取っていたのかという問題は、本論の主旨から外れるが大変興味深く、今後の課題としたい。それにしても、西が、理論としての妥当性を、思弁的なものから、実証的なものへと決し得た根拠は奈辺にあったのであろうか。

この問題については、西の『生性発蘊』が参考になるように思われる。『生性発蘊』は、ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes, 1817-1878) の『哲学史』*The Biographical History of Philosophy, from its origin in Greece down to present day. 1857* の一篇（西自身は「英ノ若耳治、顛理、列微スカ、千八百五十七年ニ、刊行セル、^{バイオグラヒケルヒストリオフヒロソヒ}附傳哲學史ノ最後ノ篇ヲ譯シテ」と述べる¹⁴）と、同じくルイスの『コントの科学哲学』16-21章 *Comte's Philosophy of the Sciences: being an Exposition of the Principles of the Cours de Philosophie Positive of Auguste Comte.* の Part I. Fundamental sciences. Section XVI-XXI（西による邦題は『坤度氏物理哲学』。西自身は「列微スノ千八百五十三年ニ、刊行セル、坤度氏物理哲學ト題セル書ノ、第一卷第十六章ヨリ第二十一章マテヲ譯シテ」と述べる¹⁵）の抄訳と、さらには一部西の解説から構成されている。基本的にはルイスの二著を西周が抄訳した合本と言えるものである。西周のコント理解は、このルイスの著作に基づいている¹⁶。

ルイスのコントに対する思想史的位置付けは、『哲学史』の章題に端的に示されている。

ルイスが、原本第1シリーズのコントに関する一章に与えた題目は、「最終的に実証科学のためにその地位を譲った哲学」(Philosophy finally relinquishing its Place in favor of Positive Science.) (769頁)である。また、『哲学史』の第2シリーズ¹⁷、コントに関わる章「Twelfth epoch」の題目は、「哲学史における最終的な転機と、実証主義の決定的な確立」(Final crisis in the history of philosophy, and definitive establishment of positivism.) (231頁)である。

結局のところ、ルイスの哲学史理解では、従来の西洋哲学における伝統的な哲学概念は、19世紀後葉には数度の転機を経て、実証学にとってかわった。ルイスによれば、その最初の転機はスピノザ¹⁸ (1632-1677) によってもたらされ、二度目はトマス・リード¹⁹ (1710-1796) によってもたらされる。その後、「折衷」という思惟とともに最後の転機をむかえ、コントの登場により、哲学に値する学問は完全に実証主義にとってかわることとなる。ルイスによれば、実証主義こそが、西洋哲学史上において伝統的価値観にとってかわる哲学の基準であった²⁰。

西周は、ルイスによるかかる思想史整理を踏襲していたと言えるであろう。『百一新論』における西の観点は、ルイスが提示した哲学の変遷を、中国思想史、ひいてはその影響のもとにあった日本思想史理解に引き当てているかのようでもある。

また、その一方で、桑木徹翼氏は、西の実証主義的傾向を認めながらも、実証主義とは相容れない側面をも持ち合わせていたことを指摘²¹している。その一つの傍証として、西のキリスト教に対する評価の変遷に着目している。

西の留学以前のキリスト教観では、前述の「文久二年五月十五日」付の松岡宛の書簡に「毛の生えたる仏法」と記すほどに無理解であったものが、帰国後には「苟モ万有ノ故ニ通ジ心性ノ徹ヲ究ムレバ即チ其智以テ主宰ノ在ルアルヲ推シテ之ヲ信ズルニ足ル」（『教門論』）と、むしろその態度を大きく変えたことが指摘されている²²。

たしかに、実証主義に開眼したとされる時期を経て、かえって神への理解を深め得ていたことは、桑木氏の見解通りであるように思われる。ただし、それは、単にキリスト教文明に留学を果たし、そこに住まう人々の信仰を目の当たりにしてきたが故のものであるのか、彼自身のうちに宗教的な価値観の転換があったものであるのか、あるいはなんらかの哲学的思索に基づいて至った見解であるのか、未だ判然としない。もっとも、合理論を離れ、実証主義・実証哲学に徹底して基づきつつ、その上で、あえて形而上的實在たる「人格神」を前提とする哲学体系を打ち出そうとした人物について、論者自身は、寡聞にして知らない。

3. 『百一新論』成立時の背景

『百一新論』では、西はその見解をいずれも宋学をはじめとする伝統教学との対比を軸に論ずる一面がある。また、西が『哲学史』をはじめとするルイスの思想史理解を踏襲していたのだとしても、それを妥当と決するには、それなりの根拠があるようにも思われる。そこでここでは、まず西による『百一新論』成立時の背景を確認しておきたい。

『百一新論』は、明治6年（1873年）出版官許、同7年（1874年）刊行であるものの、実は、その成立すなわち稿本作成時期については、よく分かっていない。

出版は山本覚馬によるものであり、その序が付されている。山本覚馬は、元会津藩士、新島八重子の兄であり、また横井時雄の岳父の一人である。

山本は、会津藩主松平容保が京都守護職となった元治元年（1864年）から、京都に滞在している。ちなみに、蛤御門の変にて目を負傷し、その後、眼病（白内障）を発し失明する。また、新島讓が明治8年（1875年）に創設した同志社英学校（後の同志社大学）に、その翌年（明治9年/1876年）、自らが購入していた敷地（旧薩摩藩邸）を提供している。『百一新論』の刊行事業は、山本にとって、同志社英学校創立の直前に行われていたことになる。なお、新島讓と八重子の結婚は明治9年（1876年）である。

山本覚馬と西周との交流は、西が、オランダ留学から帰国した翌年、慶応2年9月より徳川慶喜に側近として仕え、慶応3年（1868年）王政復古の変革まで、京都に滞在した間とされている²³。

その間の西の動向は、西自身が記した「日記及び書翰」（『全集』第三巻、401-716頁）や「西家譜略（自叙伝）」（『全集』第三巻「雑纂」内、719-783頁）等によって窺い知ることができる。ただし『全集』を管見した限りでは、これらの諸著から山本との交際記録は確認できなかった。津田真道宛書簡（『全集』第一巻、716頁）において、山本が津田との面会を求め上京しようとしている旨を書き送った書簡があるものの、該書はその人物紹介に終始する短文である。また、「日記」の「明治十八年六月廿一日」には山本覚馬に「書状を認め出す」（『全集』第三巻、510頁）とあるものの内容は不明。なお明治18年は山本覚馬が受洗した年であり、また京都商工会議所会長に就任した年でもある。

西の京都滞在中（慶応2年から慶応3年）から、『百一新論』刊行までに出された『西周全集』所載の書簡を列挙すれば、以下の通りである。頁数は、『西周全集』第三巻のもの。ここでは、特に西自身の言説から『百一新論』にも関わる語句や見解を探ってみたい。

慶応元年12月12日 加藤弘之宛 653頁 (ライデン発信)
 慶応2年9月12日 相沢 朮^{おけら} 宛 (湛庵) 690頁 (江戸発信)
 慶応2年10月12日 松岡鱗次郎宛 625頁 (京都発信) 「百学之情状」「大变革」 ①
 慶応3年正月6日 松岡鱗次郎宛 627頁 (京都発信)
 慶応3年正月26日 相沢 朮 (湛庵)²⁴宛 690頁 (京都発信)
 慶応3年3月6日 松岡鱗次郎宛 630頁 (京都発信) 「教法」への言及。暗殺事件。 ②
 慶応3年4月7日 津田真道宛 662頁 (京都発信) 「塾」「塾生」についての言及あり。
 慶応3年4月26日 津田真道宛 663頁 (京都発信) 開成所と医学所の合併。
 慶応3年5月9日 松岡鱗次郎宛 632頁 (京都発信) 塾についての言及あり。
 慶応3年6月22日 松岡鱗次郎宛 635頁 (京都発信) 政庁の翻訳御用
 慶応3年8月17日 津田真道宛 663頁 (京都発信)
 明治元年8月2日 相沢 朮 (湛庵) 宛 691頁 (東京発信) 商人になる申請許可が下りない。
 明治2年正月25日 相沢 朮 (湛庵) 宛 692頁 (沼津発信) 沼津兵学校着任挨拶等。
 明治2年4月16日 永見裕宛 701頁 (沼津発信)
 明治2年5月12日 永見裕宛 701頁
 明治2年9月20日 永見裕宛 702頁 (沼津発信)
 明治2年10月17日 永見裕宛 702頁 (沼津発信)
 明治2年11月晦日 松岡鱗次郎宛 641頁 (大阪発信)
 明治3年3月17日 松岡鱗次郎宛 643頁 (大阪発信)
 明治4年11月3日 松岡鱗次郎宛 644頁 (東京発信)
 明治6年4月6日 相沢 朮 (湛庵) 宛 694頁 (東京発信) 新聞の力。「蒸気車」について「千里も一同
 様ノ思をなし申候」(新橋横浜間の鉄道開通
 は明治5年)
 明治6年6月21日 松岡鱗次郎宛 639頁 (東京発信)
 明治7年6月3日 相沢 朮 (湛庵) 宛 695頁 (東京発信)
 明治7年8月9日 相沢 朮 (湛庵) 宛 696頁 (東京発信)
 明治7年8月26日 相沢 朮 (湛庵) 宛 697頁 (東京発信)
 明治7年8月31日 津田真道宛 716頁 山本覚馬について。
 明治8年8月27日 相沢 朮 (湛庵) 宛 698頁 (東京発信)
 明治8年11月18日 相沢 朮 (湛庵) 宛 698頁 (東京発信)

このほか、舛子夫人の日記があり、そこには、山本覚馬が登場する。山本は、慶応3年11月、西の塾生40名ほどが退塾の意志を示した際、これを翻意させるべく尽力した²⁵。翌12月9日、王政復古の号令とともに、西は慶喜に付き従い大阪に赴く。さらに翌月、鳥羽伏見の戦いが起こると、京に留まっていた山本は、薩摩藩兵に捕囚される。

慶応年間には明治維新の激動期である。特に西周は、徳川慶喜の側近として幕末時代を記録しており、これらの記録は歴史的資料としても大変興味深い。

そのなかでも『百一新論』にも関わる語が①②を付した松岡宛書簡に見られる。

① 慶応2年10月12日 松岡鱗次郎宛

(略)

扱又小生義は彼地ニ到候途次ニ壹ヶ年、留學貳ヶ年半、歸程ニヶ年、通而四年ニ近く足かけ五年程西遊仕候處、其内ニ本邦は時勢之变革頗血臭き世と相成候事實ニ嘆息之至に御座候、(中略) 扱又彼ノ地ニ遊

候而は別ニ成業之角も無之候得共彼洲内政治之大體と百學之情狀とは略研究仕候、實に攘夷家には嫌忌も有之候得共、政治之公大凡百學の精微、利用厚生之道相開ヶ候は、實ニ千左(古カ)東西未曾有之盛美ヲ盡候事と奉存候、委曲は晤會なら而は難悉猶佗年ヲ期候事ニ有之候、大兄ニは今如何之景況ニ而御起居被成候哉、俗吏なり哉學者なり哉、又は兵士なり哉定而不平之鳴も有之候事と奉察候、來書中ニ云阿鍼娘既ニ嫁すと可賀可祝、自佗令子令愛定而繩々御繁昌奉察候(小生は未タ子なし、養子之望あり)、若シ有賢息而洋書ヲ讀ましめんと之御心も御座候ハ、小生も大兄交情厚きニ報する爲盡力可仕と奉存候、然とも洋學は漢學ありて始而可なり、始方洋學ニ入るは甚不可なりと奉存候(中略)今來天下之形勢大變革ニ而、殆列國之狀と相成覇府の勢も衰頽ニ至候處、我輩幸ニ新大君(徳川慶喜)ヲ得少は屬望之事ニ御座候。乍併是迎も天下は未タ如何乎相成候哉不可計之時なり、(以下略)²⁶

西は「彼地」すなわち欧州留学に足掛け五年を要しており、その間の日本における時勢変革の血生臭ささに嘆息している。『百一新論』においては、「百教」という言い方がみられるが、西はここで、「百学」という語を用いている。西自身の語として、「百一新論」のみならず「百学連環」をも想起させる。

ここからは、百学が政治体制とともに、欧州社会を成立せしめる主要素と見なす言説が確認できる。すなわち、西は、留学中、欧州における政治体制と、百学の情状とについて研究してきた。その結果、攘夷家には嫌忌されるだろうが、との断りを入れた上で、西洋における政治の公大さと百学の精緻さについて、これを利用厚生する道がひらけたならば、実に多くの助けとなり、東西世界においても、未だかつてないほどの盛美さを発揮するようになるとの予見を述べている。すなわち西は、日本において、西洋学術を利用しさらに豊かなものにする道を望んでいたようである。西洋的価値観に対する西の高い評価が窺われる叙述であると言えるが、一方で、日本においては漢学あってこそ洋学がなるのであり、漢学を廃して洋学から学び始めることはまったく出来かねるといった見解をも呈している。

ここにおいて西周は、漢学の有用性の上に、洋学やその百学の盛美を見ていたものと言えるであろう。西周の考え方として、洋学に価値を見出すものの、それがために漢学の全廃や排斥、ひいては漢字撤廃を志向していたようには思われない。この時点において、西周は「百学」の基礎として漢学を位置づけていたのである。

② 慶応3年3月6日 松岡麟次郎宛

二月廿六日之貴翰本月五日相達難有拜誦仕候、十七日御歸着ニ相成候由、爾後御清適奉拜賀候、小維蘭五册御送被下難有、当分拜借奉願候、御滞京中は度々御馳走相成、且珍品之御土産共重々感謝仕候、其着後も不相替御鞅掌之由御苦勞奉候、當地爾來相變候事も無之、本月朔日頃荒神口ニ而河原ニ五人之屍有之四人は頭なく壹人は有之、人品は何とも分り不申候得共、土もあり町人も有之、何等之意趣か未タ相分り不申候由、乍併右之場處宗忠太明神之社ニ近く、夫故其教法之意趣ニも可有之と世上之取沙汰ニ有之候、政府之動靜は大目付永井玄蕃頭、先達而九州に被參歸京直ニ若年寄格ニ昇進有之、筑前ニ被居候五卿も近々歸京之由なり、御歸着後

大君ニも二月十九日再度御下坂有之、佛國水師提督に謁見ヲ被仰付候、佛國方朝鮮ニ而分捕候兵器獻上、日本之兵器よりも猶鈍き物多と云ふ、朝鮮之戦争ニ付外國奉行壹員對州に參候由、乍併其策之如きは吾輩之與り知る所ニあらず、(以下略)²⁷

京都にある宗忠神社の創建は、文久2年(1862年)である²⁸。慶応3年(1865年)の時点では、まだ創建したての新しい神社であり、慶応元年(1865年)に、孝明天皇により勅願所に選定されている。

武士町人を問わない5名に対する不可解な連続大量殺人事件についての叙述である。西周からすれば、わざわざ被害者の身元を隠そうとする犯人の意図が不明の事件であるが、人々はそれでは済ませない。神社の近辺で起こった事件であるがために、人々はなにかしらの「教法」の意図があるのではないかと取り沙汰し

ていたというのである。西が人々から聞き知った「教法」とは、単に宗教的価値観の教授を意味するのみならず、本来受容側であるはずの人々が、自ら進んでそこに何かしらの規範的な価値や意味をそれぞれに見いだそうとする意識でもあったと言えよう。人々の実情からすれば、不可解な事件であっても、それを各自に適した「教法」として受け止めればよいことになるであろうか。すなわち当時の世情における「教法」においては、真実や明確な要因などは、さして問題にならなかったのである。

「教法」も、『百一新論』における主題の一つである。そこには、慶応年間の京都におけるこうした西の体験が踏まえられていたものと推察される。少なくとも、かかる事件をわざわざ書状に認めていることからすれば、そこに何かしらの驚きが西にあったことは確かであろう。

4. 『百一新論』における「哲学」

「哲学」初出文献である『百一新論』は、帰国直後の実情を目の当たりにすることとなった慶応年間に起草されたものとされている。ここでは、上記を踏まえ、西にとっての「哲学」提唱の意義について考察を試みたい。

『百一新論』における「哲学」は、次のように該書の最後に3度だけ用いられている。

サレバデゴザル、教ニハ元ヨリ観行ノ二門ヲ分ツテ論ゼネバナラヌ¹デ、其行門ハ専ラ性理上ニ本イテ法ヲ立テタ者デゴザレバ、物理ノ論ニハ及バヌ²デゴザルナレ |モ、観門ノ方デハ物理ヲ参考致サナクテハナラヌ³デゴザル、併シ物理ト心理トヲ混同シテ論ジテハナラヌ⁴デゴザルガ、其物理ヲ参考致サナクテハナラヌト申スノハ、人間モ天地間ノ一物デゴザレバ、物理ヲ参考致サナクテハナラヌデゴザル、是ハ物理ト申ス内ニモ彼ノ造化史ノ學ヲ主トスル⁵デゴザツテ、其造化史ハ先ヅ金石、草木、人獸ノ三域ニ就テ諸種ノ道理ヲ論ジ、傍ラ地質學、古體學ナドト分レテ、此大地ノ出來タ初メニ反リ、又人獸ノ部ニテハアントロホロジー、譯シテ人性學ト云ヒ、先ヅ比較ノ解剖術ヨリ生理學、性理學、人種學、⁶神理學、善美學、又歴史等ヲ總ベ論ズル學術ヲ取別ケ物理ノ参考ニ備ヘネバナラヌ⁷ゴザル、總テ箇様ナ⁸ヲ参考シテ心理ニ徴シ、天道人道ヲ論明シテ、兼テ教ノ方法ヲ立ツルヲヒロソヒ⁹、譯シテ哲學ト名ケ、西洋ニテモ古クヨリ論ノアル¹⁰デゴザル、今百教ハ一致ナリト題目ヲ設ケテ、教ノ¹¹ヲ論ズルモ種類ヲ論ジタラバ此哲學ノ一種トモ云フベクシテ、仔細ハ若シーツノ教門ヲ奉ゼバ其教ヲ是トシ、他ノ教ヲ非トスル¹²常ノ事ナルニ、百教ヲ繫論シテ同一ノ旨ヲ論明セントニハ餘程岡目ヨリ百教ヲ見¹³下サネバナラヌ¹⁴デゴザル、故ニカ、ル哲學上ノ論デハ物理モ心理モ兼ネ論ゼネバナラヌ事デゴザルガ、兼ネ論ズカラト云ツテ、混同シテ論ジテハナラヌデゴザル（『百一新論』卷之下²⁹）

これによれば「哲学」とは、「天道人道ヲ論明シテ、兼テ教ノ方法ヲ立ツル」ことである。また「哲学」が属している「教」は、『百一新論』卷之上において、「人ノ人タル道ヲ教フルヲ指シテ云フ」（235頁）と定義されている。すなわち、西周にとっての「哲学」とは、「教えの方法を確立すること」であるが、それは突き詰めていけば「人道」（人としての在りよう・生き方）ということになるであろう。西によれば、「百教一致」を提唱し「教」について論ずるも「天道」「人道」をはじめとする諸概念の「種類」（いわば「基本範疇」）を論ずることや、言葉を駆使して「論明」することを「哲学」の一種と見なすことができるのである。

その営為のうちには「観・行の二門」がある。

「観・行」については、「知説三」の「學術ノ結構組織スル所以ヲ論」ずるなかに、明快な定義がなされている。

學ハ専ラ智ノ性に根サシ、観門ニ屬スル者ナリ、術ハ其知ル所ノ理ニ循ヒテ之ヲ行フノ上ニ係ハリ、行門ニ屬スル者ナリ、二ツノ者相關スルノ次序ハ學ヲ先ニシテ術ヲ後ニス。（「知説三」）³⁰

すなわち、「観門」「学」の上に「行門」「術」が成り立つ。あるいは、「行門」「術」は、「観門」「学」を基礎にしてこそ成立するものとも言えよう。

「行門」は、性理に基づいて「法」をうち立てたもの。いわば人間に内在する「行動準則」と言うべきものとなる。この「法」については、「又法ハ教ノ事ニ夫程ノ關係ハナイ」デ、法ヲ以テ人ヲ治メルト教デ人ヲ導ク「ハ素ヨリ二途ナ」ダト云フ事ガ別ルデゴザル」（『百一新論』巻上、261頁）とある。「法」と「教」とを取りあげて、互いに干渉し合うことのない、「二途」の異なる概念として捉えている。

また端的に「法」は「人ヲ治メル道具」、「教」は「身ヲ治メル道具」（『百一新論』巻之上 263頁）として大別してもいる。かかる「法」と「教」との区別については、『百一新論』巻之下における主題の一つでもあり、機会を改めて再度論究することにしたいが、統治のための「法」は、客観的基準を立てることで各自の主観的な判断基準を排するための手法であり、「人ヲ導ク」に関わる「教」は、自律的規範を内発的に喚起するための手法とでも言えようか。

ただし西は、「行門」における「法」については、性理・心理を基礎にうち立てるものとし、あくまでも「教」の領域としている。そして、この「行門」の成立においては、必ずしも物理の論説は必要性としない。

一方「観門」の成立においては「物理を参考にする」こととなる。西は、この「物理」の主たる内容を、「金石・草木・人獣」の三部門にまたがる「造化史ノ学」（博物学）とし、人も天地間に存在する一物であるため、金石・草木と同様、物理として、客観的な講究対象に位置づけている。

この意味において、心理と物理とを区別した上で、人の心理を講究する上においても、人の物理を参考しなければならぬと言うのである。「物理」——人が人として存立するために前提となる自然科学的ないし客観的諸条件——を詳らかにするため、「博物学」が講じる自然科学の領域や、人の営みを講じてきた「歴史学」などを位置づけている。

しかしながら、西は、かかる「物理」の講究のみによって、「教」についての十全な理解が得られるものとしてはいない。最終的には、この「物理」を「心理」において「確認」し直し、両者を兼ね「一致」する地平を見だし、そこにおいて「人の人たる道」を明らかにして、その「教の方法をうち立てる」ことを求めている。それが「ヒロソヒー」であり「哲学」と訳される「学」となる。

西周の「哲学」では、物理と心理とに対する探究が、いわば相補的になされることになるであろう。西によれば、この物理と心理との結節においてこそ、より有用で実証的な「教」（人の人たる道・あり方を教える）が成り立つのである。西周はかかる実証的な「教」を樹立する方法を「哲学」と述べている。

5. 結語

西周が、留学先の欧州にて目の当たりにしたのは、「政治の広大、百学の精微」であった。また、その学術を学び取るこの先には、「東西未曾有の盛美を尽くすものになるであろう」といった可能性を見ていた。

さらに、帰国直後の京都において、西周は当時における具体的な日本人の精神に触れることになる。そこには、討幕運動という世情の最中にありながら、浮世離れしてあまりにも主観的で、楽天的な人々の精神があったと言える。

明治期に刊行した『開題門』において、西は、従来のアジアの思想に実証主義が未徹底であったことを強調している。しかしながら、西自身が翻訳したルイスの『哲学史』によれば、「実証主義」は、アジアのみならず、西洋における哲学史の変遷においても、最先端の思潮であった。

西にとって実証的論説は、無論維新期の日本においても必要欠くべからざる手法であったに相違ない。

西周は、実証論という、東西思想における最先端の方法論を、アジアや日本の土壌において応用し、確立しようと企図していたのである。その一端が、『百一新論』における「中国思想史の変遷」理解にあり、また、西自身の慶応年間での体験から導き出された具体的な問題を解決に導くための方途そのものでもあった

のである。

『百一新論』は、西による最先端の「学・術」を打ち出すために、西が言うところの「哲学」的営みを自ら体現してみせた著作だったとすることができるであろう。

註

- 1 底本は、大久保利謙編『西周全集』宗高出版。以下『全集』巻数、頁数を記す。なお、文字については底本通りに記すよう努めたが、「情」「微」「覇」等、異体字のフォントが見つからなかった文字については新字体を用いた。
- 2 該書では、西洋の思想史・哲学史の変遷を語ることのないままに、「哲学」への言及がある。西周自身による西洋思想史理解に類する内容は、『全集』第三巻所載の「隨筆」に見られる。
- 3 『生性發蘊』（『全集』第一巻）に「哲学」に関し、西自身の語注が次のようにある。「哲學言語、英フィロソフィ、佛フィロソフィー、希臘ノフィロ愛スル者、ソフォス賢ト云義ヨリ傳來シ、愛賢者ノ義ニテ其學ヲフィロソフィト云フ、周茂叔ノ所謂ル希賢ノ意ナリ、後生ノ習用ニテ専ラ理ヲ講スル學ヲ指ス、理學理論ナト譯スルヲ直譯トスレトモ、他ニ紛ル多キ爲メニ今哲學ト譯シ東洲ノ儒學ニ分ツ」（31頁）
- 4 西による philosophy 概念の翻訳に関する論考としては、林美茂「哲学か、それとも理学か—西周の philosophy 概念の翻訳問題を巡って」（『アジア文化研究』39、2013）がある。なお、「理学」は、中国哲学概念として、遅くとも 11-12 世紀以後特に言及されてきた。とりわけ「実理」は、朱子学が説く「形而上」（出典は『易』繫辞上傳）的概念とも関わり、むしろあるいは「空」と対比されるなどして、極めて重要な語として位置づけられてきた。例えば『朱子語類』巻四、性理一には「蓋性中所有道理、只是仁義禮智、便是實理。吾儒以性爲實、釋氏以性爲空」などがある。さらには「賀孫問『聖人所以因陰陽說出許多道理、而所說之理皆不離乎陰陽者、蓋緣所以爲陰陽者、元本於實然之理』。曰『陰陽是氣、纔有此理、便有此氣。纔有此氣、便有此理。天下萬物萬化、何者不出於此理。何者不出於陰陽』。賀孫問『此程先生所以說道、天下無性外之物』。曰『如云天地間只是箇感應』。又如云『誠者、物之終始、不誠無物』」（『朱子語類』巻六十五、易一）ともあるように、理氣論や陰陽論と関わり「あらゆる存在の原理」、「感応の原理」としての一面もある。さらに言えば、「実践・工夫」と「窮理」とを結びつける言説も多々ある。一例を挙げれば「存養與窮理工夫皆要到。然存養中便有窮理工夫、窮理中便有存養工夫。窮理便是窮那存得底、存養便是養那窮得底」（『朱子語類』巻六十三、中庸二）がある。あるいは端的に「性者、吾心之實理」（『朱子語類』巻六十、孟子十）、「誠者、天之道。誠是實理、自然不假修爲者也」（『朱子語類』巻六十四、中庸三）など、人間存在の存立性や、「天之道」（鄙見によれば世界実在の存立性）とも関わる概念でもある。また「窮理」から言及しようとするれば、『大学章句』の「格物補伝」にある「所謂致知格物、言欲致吾之知、在即物而窮其理也」、すなわち実践主体において対他関係に即して把握される「理」、いわば「理」が含意している「関係性」への視座を顧慮しないわけにはいかない。千差万別なる物そのものを捉える「知」の在り方に、「理」は関与している。いずれにせよ「実理」ないしその基本概念たる「理」は、朱子学において多面的に捉えられている。朱子学ばかりではなく陽明学においても、無論「実理」は極めて重要である。西周が、かかる「理」説に対して如何なる見解を示したかといった問題は、宋明学的「理」観との対比の上においても解明する必要があるだろう。
- 5 古くは桑木巖翼『日本哲学の黎明期—西周の『百一新論』と明治の哲学界—』（水心肆書、2008）がある。該書所載の論文は次の通りである。「西周の哲学—明治初期の哲学的傾向—」（『明治の哲学界』中央公論社、1943年3月25日）、「西周の百一新論」（初出は、日本放送出版協会刊、1940年5月30日）。
- 6 桑木巖翼「西周の百一新論」（『日本哲学の黎明期—西周の『百一新論』と明治の哲学界』水心書肆、2008）52頁
- 7 『全集』第一巻、19頁

- 8 一応の理解であり、問題が残る。「明天道」については、経文では『礼記』郊特性篇に「郊所以明天道也」と見られる。西周がこれに如何なる理解を与えていたのかは、一大問題となる。朱子学的理解による「天道」には、例えば「天道流行、發育萬物、有理而後有氣。雖是一時都有、畢竟以理為主、人得之以有生。」(『朱子語類』卷三、鬼神)がある。また「明天道」には、これに類似する表現として『論語』為政篇の「知天命」もある。この場合『論語集注』では、「天命、即天道之流行而賦於物者。乃事物所以當然之故也。知此、則知極其精而不惑、又不足言矣」と注している。さらには、『朱子語類』卷二十三、論語五、為政篇上に、「問『五十知天命』、集注云『天命、即天道也、事物所以當然之故也』」などとある。「天道を明らかにする」という事態そのものは、朱子学的理解においても極めて重要な営みである。朱熹によれば、「天道」とは、主に「天命」の語釈として「事物の当に然るべき所以の故」と理解され、それは、あらゆる生命を生み育む原理的作用(天道流行、發育萬物～人得之以有生)である。また、「立人極」についても、周敦頤『太極図説』にある語であり、歴史的に数多言及されてきている。「あらゆる生命に通じる存立原理を人の基本的な行動準則として確立する」ことと解せる。やはり極めて重要な語となるが、ここでは紙幅の都合、いずれも指摘のみにとどめたい。
- 9 『岩波哲学・思想辞典』(岩波書店、1998) 1119 頁
- 10 『全集』第一巻、615 頁
- 11 『西周に於ける哲学の成立』(有斐閣、昭和 62 年) 130 頁
- 12 前掲書、131 頁
- 13 いわゆる朱陸論争における主題の一つである。朱陸論争については、吉田公平『陸象山と王陽明』(研文出版、1991) 参照。ここに見いだされている「独断」に類する概念としては、やはり朱子学批判の言説のうち「意見」「閑議論」として論じられている。小路口聡『「即今自立」の哲学—陸九淵心学再考』(研文出版、2006) 参照。ここで言う「意見」とは、「臆見」に類するものであり、いわば思弁的見解のことを否定的に述べた語といえるものである。また、明末清初に至ると、陸王学批判を展開した朱子学派や、宋明学の換骨奪胎という一面を有していた明末天主教が提唱した「格物窮理」や「実学」、あるいは清朝考証学における「実事求是」など、この論争の系譜は続いている。さらには、日本においても一大思潮となっていた(吉田公平『日本における陽明学』ペリカン社、1999 参照)。
- 14 『全集』第一巻、41 頁。「最後ノ篇」について、該書原本では、ELEVENTH EPOCH. CHAPTER I. Eclecticism. CHAPTER II. AUGUSTE COMTE とある。該書の章立ては、「古代哲学」と「近代哲学」とに大別され、それぞれ 10 前後の epoch によって構成されている。前者は、タレスから新プラトン主義プロクロスまで、後者は、ベーコンからコントまでである。ルイスによれば、19 世紀における史上最先端の哲学は、実証学であった。また、ルイスは、この代表者をコントと見ている。
- 15 『全集』第一巻 67 頁。章数について『全集』「解説」は「XVI-XX」としている。大久保氏によると、浄書本には、『コントの科学哲学』第 21 章分の訳文が収められていないとのことである。浄書本の内容は、『全集』(第一巻) 110 頁まで。第 21 章分については、浄書本とは異なる 2 部の翻訳草稿版によってその全体が示されている。一つ目の翻訳草稿は、「生理學」と題する帳面。『全書』では、110 頁以後、「第二十一章性理學腦學新説」に該当する。章題には「性理學」とあるものの、草稿版の題目は「生理學」となっている。『全集』解説の「第四十一圖」(622 頁)には、「生理學」と題された表紙写真がある。もっともこの草稿「生理學」は、『全集』85 頁～110 頁の内容、すなわち、ルイス原本の第 18 章から第 20 章までの内容をも含んでいるとのこと。ただし大久保氏は、『全集』(浄書本)を校訂する際にはこれを参照していないとのことである。もう一部は、その続稿に当たる訳稿で、番号のみの無題のものとのこと。『全集』120 頁以降に「附載」として掲載されている。なお、大久保氏は、西が挙げているルイス原本の 1853 年版を入手できず 1883 年版を用いたとのこと。大久保氏は第 17 章の原本の題目を“Philosophical Anatomy”としている。一方、1853 年版の目次に示されている章題は“Philosophic Anatomy”である。大久保氏が表記した章題は、目次によるものではなく、本文内に示された章題と一致している。管見した限り、1853 年版、1871 年版、1883 年版は、いずれも目次内の章題と本文内の章題とに齟齬がある。したがって、再版

のたびに修訂作業が行われていたわけではないように思われる。

- 16 『全書』第一巻「解説」「西のコント知識はコントの原著ではなく、その通俗的解説書によるものであった」とある。(621頁)
- 17 原本の『哲学史』(*The Biographical History of Philosophy*)には、西が底本にしていた「ギリシャの起源から今日に至るまで」(*from its origin in Greece down to the present day.*)という第1シリーズ2巻本と、それとは別の「ベーコンから今日に至るまで」(*from Bacon to the present day.*)という第2シリーズ2巻本とがある。以下、両シリーズに共通する時代(近代哲学)にて、そこに挙げられている人物を列挙しておく。なお括弧内は、第2シリーズに章立てされておらず、第1シリーズにだけ章立てられていた人物である。ベーコン、デカルト、スピノザ、ホッブズ、ロック、ライプニッツ、パークリー、ヒューム、コンディヤック、(ハートリー、ダーウィン、)リード、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、(カバニス、ガル、)コントと続く。
- 18 スピノザに関わる章「演繹法の基礎」(*Second epoch—Foundation of the deductive method—*)の総論となる節題 CHAPTERVIIに、「近代哲学における最初の転機」(*First crisis in modern philosophy*) (第2シリーズ155頁)とある。ちなみに、*First epoch* はベーコン特集となっており、「帰納法の基礎」(*Foundation of the inductive method.*)とある。「*third epoch*」の章題は、「心理学の問題に還元された哲学」(*Philosophy reduced to a question of psychology.*)とあり、ホッブズ、ロック、ライプニッツが登場する。章題に示されたルイスによる思想史理解からすると、近代哲学は帰納的方法を基礎としてはじまり、演繹的方法によって最初の転機がおとずれることになると言えるであろう。
- 19 リードに関わる章(*Seventh epoch*)の章題に、「第二の転機—観念論、懐疑論、常識的な反応を生み出す物質主義」(*Second crisis—Idealism, scepticism, and materialism producing the reaction of common sense*) (73頁)とある。
- 20 林美茂氏は「実証主義は当時の西洋哲学界の主流であり、19世紀西洋における自然科学の勃興に伴って出て来た斬新な思潮であった」(前掲論文230頁)と指摘されている。
- 21 桑木徹翼「西周の哲学」(『日本哲学の黎明期—西周の『百一新論』と明治の哲学界』水心書肆、2008)19-20頁。例えば、「かくの如く西氏の思想には実証主義と全然同一とは称し難い所があるが、しかし啓蒙思想の共通性を包有する限り、結局実証主義的経験論の範囲を脱するには至って居ない。それ故にその問題は会々批評哲学と一致するところがあり、その方法もまた批評的性質を有する所があるが、しかしその問題の解釈法はいわゆる心理主義実証主義的であって、価値を価値批評の眼より論ずるのではなく、却てこれを一の自然的事実として記述説明せんとするものである」等の叙述から。
- 22 桑木氏前掲書、21頁
- 23 『百一新論』についての大久保利謙の「解説」を参照。『全集』第一巻、635頁
- 24 相沢朮(湛庵)は、西周の義兄。妻舛子の兄。父は越後の松平日向守の侍医石川有節。朮はその長男で、舛子はその二女である。朮はのちに西尾張藩の測医相沢良安の養子となりその家督を継ぐ。朮の次女に、山辺丈夫に嫁いだ定子があり、西夫人の姪に当たる。『渋沢栄一伝記資料』(https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/index.php?DK100002k_text)に、「山辺定子氏談話」がある。山辺丈夫は、西と同じく津和野藩の出身。大久保氏解説によれば「西の門人中最も傑出した人物の一人で、日本紡績史上創業者の一人である」(『全集』第三巻、「解説」87頁)。明治10年(1877年)に渡英し、渋沢の援助を受けながら彼の地で学んだ。英国からは紡績機械を買い付けて帰国し、明治15年(1882年)渋沢の支援も得て東洋紡(現在の東洋紡株式会社)を創設する。「談話」によれば、西周と渋沢栄一は親しい間柄にあったようで、渋沢が特に関心を有していたことから、『論語』について語り合っていたとある。西周の塾は神田の西小川町にあり、西の屋敷は、西小石川にあった。西の記録によれば、渋沢栄一についての古い叙述は、やはり京都滞在中の書翰に見られる。
- 25 川嶋保良、柳秀子「〈翻刻〉西升子日記(下の一):慶応三年八月より明治八年十一月までの事(その一)」

『學苑』717、2000 参照。

26 『全集』第一卷、625 頁

27 『全集』第一卷、630 頁

28 京都神楽岡宗忠神社 HP (<http://munetadajinja.jp>) 2018 年 9 月 1 日参照。

29 『全集』第一卷、288-289 頁

30 『全集』第一卷、458-459 頁

キーワード：西周・慶応年間・「哲学」・実証主義・『百一新論』